

# オランダ東インド会社によるダイヤモンド交易

——J・P・クーンの書簡集を中心に——

和田 郁子

【要約】 オランダ東インド会社によるダイヤモンドの購入は、まずボルネオ島北西岸スカダナを中心に始められ、一六二〇年代にコロマンデル海岸を積み出し港とするインド産のものへと拡大していった。後者は埋蔵量・産出量ともに豊富と見なされ、会社も当初は大きな期待を寄せたが、実際には現地での紛争・政策等に左右された不安定な供給量、購入価格の高騰に悩まされ続けた。そのため、会社はインドでの取引開始後も、互いに供給を補完するような形で双方の産地で取引を行い、これにより継続的に原石を入手し続けようとした。これは本国の研磨技術の発展とも結びつき、今日まで続くオランダのダイヤモンド研磨業の基盤形勢に役立ったと考えられる。また、東南アジア各地の君主へのダイヤモンド売却の例は、当時ヨーロッパにおける研磨業の中心であったオランダの技術がこの地域でも好まれ、取引の要件としても重要であったことを示唆するものである。

史林 八一巻六号 一九九八年十一月

## はじめに

今日ダイヤモンドは宝石として広く一般に知られているほか、地球上のあらゆる物質の中で際だって硬いという性質を生かし様々な工業の分野で用いられている。このダイヤモンドは、かつては専らインドで産出される「インドの石」と見なされていた。例外として四―五世紀頃からボルネオ島での産出も確認されているが、その量はインドのその比ではな

かつたからである。インドの神話ではダイヤモンドは、いかなるものをも砕き、いかなるものをも裂くことができるインドラ神の武器、ヴァジュラ（雷筵）として現れる。また、古来より不滅・不死の象徴、或いは魔力を持つ石と見なされて重んじられ、数ある寶石の中でも、力の象徴として、特に権力者に好まれた石であったと言われている。

しかしヨーロッパでは、長い間ダイヤモンドの宝石としての地位は、ルビーやサファイア等のカラストーンよりむしろ下に位置づけられていた。その卓抜した硬度のゆえに研磨が困難であったためである。また、原石のダイヤモンドはさほど見栄えのするものではなく、研磨されて初めてその美の本領を発揮するためでもある。この研磨の技術は特に一五世紀以降のヨーロッパで発達し<sup>①</sup>、それによってダイヤモンドの評価も高まった。

古来より現代までのダイヤモンドの産出や交易の歴史を概観した研究としては、L'Anson のものが有用である<sup>②</sup>。そこでまずはじめに主としてこれに基づいて、ヨーロッパにおける研磨業の発達について簡単に述べることとする。

一三世紀以降、アレクソポやホルムズ等を経由し、多くの仲介者たちの手を経てまずダイヤモンドが運び込まれていたのはヴェニスであった。そのため、研磨業もまずヴェニスを中心に興り、それからネーデルラント南部のフランデレン地方（特にブルッヘ）に広まった。当時はフランデレンへもヴェニスからの石がもたらされていた。しかし、一五世紀末にポルトガルがインドに達して以来、海路による原石の直接入手が可能になった。特に一五一〇年のゴア攻略以後、ここから多くのダイヤモンドが搬出されるようになり、また直接この地に赴いて取引を始めるポルトガル人以外のヨーロッパ人宝石商らも現れ始めた<sup>③</sup>。この頃までに研磨業は、当時まだポルトガル（スペイン）支配下にあったアントウエルペン等のフランデレン諸都市に伝わっていた。そして、これらの諸都市だけでなくヴェニスでも、原石をリスボン経由で入手するようになった。しかし原石の入手に関する優位性を失ったヴェニスでは、交易の衰退に伴い、徐々にダイヤモンド研磨業は衰えていった。一方、ネーデルラントの研磨業はアントウエルペンのポルトガル系ユダヤ人研磨工たちを中心に発展し、同世紀後半に彼ら南ネーデルラントの研磨工たちのアムステルダム等への移住に伴って北ネーデルラントへと伝えられた<sup>④</sup>。

オランダがアジアへの航海を開始したのはまさにこの頃のことである。

一七世紀には、オランダ・イギリス・フランス等の各国がアジア方面へ乗り出してきたが、その中でまず優位に立ったのはオランダであった。アムステルダムやアントウェルペンにおけるダイヤモンド研磨業は、これ以後オランダが自らダイヤモンド取引に参加したことによってますます栄えた。一七世紀後半からはイギリスもこの取引に深く関わり、やがてロンドンが世界のダイヤモンドの、特に原石の市場として知られるようになるが、それでも現在に至るまで、研磨業の中心地としてのアムステルダム・アントウェルペンの地位は保たれている。今日でもダイヤモンドの加工・販売業はオランダ・ベルギー両国の重要な産業の一つである。<sup>⑥</sup>

一七世紀前半、オランダとポルトガルは産地からの原石獲得において競合していた。両者のダイヤモンド取引に関する最大の違いは、オランダのそれがオランダ東インド会社（*Vereenigde Oost Indische Compagnie*、以下「会社」或いは「オランダ」と記す）という一つの集団として独占貿易を目指していたのに対し、ポルトガルでは個々の商人によって営まれていたことであろう。ゴアの商人たちの仕事は主として原石をリスボンに送る仲介であり、そこからこれらの二都市をはじめとする研磨地への輸送など、その後のことは別の人々が扱っていた。これに対して会社は、大量のダイヤモンドを直接アムステルダムやアントウェルペンに供給し、そこで研磨することができたと考えられる。そして同世紀後半にはさらにイギリスがダイヤモンド取引へ参入してきたにも関わらず、依然としてこれらの二都市への供給は会社が賄っていたという。

以上のことから、現ベルギー・オランダ両国がダイヤモンドと深い関わりを持っており、その関わりにおいて一七世紀に始まった会社による原石の取引への参加は大きな意味を持っていると考えられる。そこで本稿では、会社のダイヤモンド取引の最初の時期、すなわち一七世紀初めの状況について述べることにしたい。

一七世紀のインドにおいて、ヨーロッパ人によるダイヤモンドの取引に最も大きな影響を与えた出来事はおそらく、クルール Kullur の名で知られる大鉱山が一六二〇年頃のデカン地方東部のゴールコンダ Golkunda 王国（*Qutb Shahr* 朝：一

五一八一—一六八七）領内で発見されたことであろう。<sup>⑦</sup> 事実、オランダのダイヤモンド取引にもこの時期を契機として変化が見られた。そこで本稿においては、クルール鉱山発見の情報が伝えられる一六二〇年までとその後の一六二〇年代を分けて、それぞれの時期の状況を一、二として述べる。また、当時オランダによるダイヤモンド取引の舞台は主として、ボルネオ島では南西岸のスカダナ Sukadana であり、インドではデカン地方産の石がもたらされたコロマンデル海岸であった。一七世紀のコロマンデルにおける会社の活動については、Raychaudhuri の未刊行史料を駆使した研究が詳しく、ここではダイヤモンド取引についても概観されている。一方、ボルネオに関しては、Van Dijk が一七世紀前半のスカダナを中心とした西岸の状況を扱っている。<sup>⑧</sup> しかし管見の限り、会社と二つの産地相互の関わりに注目した研究は見られない。そのため、本稿ではこの両地域における取引の経緯を述べると共に、その状況を対比し、両者の関係について考察する予定である。さらに三では、アジアにおける売却に関わる事情を扱うことにより、当時会社が同様にアジアで売却していた他の品々とダイヤモンドの、商品としての性質の違いを検討することを試みる。

これまで会社の取引に関する研究の中で、ダイヤモンドはさほど重要視されてこなかったようである。その大きな理由は、これが会社の取引全体の中で特に大きな割合を占めていなかったためと考えられる。例えば、Giamann は一七世紀の本国向けの積み荷の送り状から品目別に金額の割合を出しているが、その際、宝石類は「葉・染料等」の多種多様な品々と共に一つのグループにまとめられている。しかも、そのグループ全体の金額の割合は全ての取引のうちの一割にも満たない。また、一七世紀半ばから一八世紀の後半までのアムステルダムのカーメル (Kamer、支部) での売上額の割合を見ても同様のことが言える。<sup>⑨</sup> こうした本国との取引金額の面から見た従来の研究では、その割合の大きい品物（一七世紀前半には胡椒その他の香料、後には織物）が重要とされて取り上げられてきた。一方、オランダのアジア域内での交易活動に注目した研究の中では、この活動において大きな役割を果たした織物、藍、米等についての分析が行われてきた。<sup>⑩</sup> しかし統計上の取引総額は少なくとも、宝石、就中ダイヤモンドについては当時の諸会社やアジアに旅した人々の多くの記録

で触れられており、これに対する関心が決して小さくはなかったことを窺わせる。

今回、中心史料としては会社の第四代(一六一九—二三)及び第六代(一六二七—二九)東インド総督(Gouverneur-Generaal)であったクーン Jan Pietersoon Coen (一五八七—二九、東インド India) には一六一三—二三及び二七—二九に在(在)の書簡集を用いた。本書の構成及び各巻の特徴については、七巻の編者でもある Coolhaas がその概略を述べている。<sup>①</sup> 本書の全七巻のうち第六巻は主に Coljenbrander によるクーンの伝記であるが、その他の巻はクーンから本国への、そしてアジア地域の各地の社員や現地の有力者などへの書簡類、彼の関わった東インドにおける決定、判決、指示その他の文書、そして本国やアジア各地から送られたクーン宛の書簡類から成る。本稿ではこのうち書簡類を主に利用した。<sup>②</sup>

- ① ダイヤモンドは劈開性を持つ結晶なのでその性質を利用した切断はインドで古くから行われていた。かつてインドでは、研磨されるとダイヤモンドの魔力は損なわれると見なされていたため、結晶の形を損なわない劈開の技術は発達したが、研磨技術は発達しなかった。しかし劈開切断では正八面体の結晶面に平行な方向以外に切断することはほとんど不可能であり、一方ファセット面を増やして輝きを増すためには劈開方向以外への切断が必要である。このための技術革新の契機となったのが一四七五年に現在のベルギーにおいて開発された、ダイヤモンド粉末を固着させた回転砥石(研磨盤)の登場であった。
- ② G. Lenzén, *The History of Diamond Production and the Diamond Trade*, tr. F. Bradley (New York, 1970) [以下「Lenzen 1970」と略す]
- ③ 「低い土地」を意味する言葉で、かつては、ほぼ現在のベルギー・オランダの領域を含む地域を指していた。一六世紀末にオランダが事実上独立した後、次第に両者は異なる歴史を持つようになるが、ここではこの語を古い時代の広域を指す名称、或いはこの両者の総称として用いた。
- ④ ポルトガルによるダイヤモンド、或いは宝石の取引については種々の概説書でも触れられているが、そのうち Alzal Ahmed は一六二〇年代に織維製品に代わって商人たちに好まれるようになった商品が宝石であるとしている。Alzal Ahmed, *Indo-Portuguese Trade in Seventeenth Century (1600-1663)* (New Delhi, 1991) [以下「Ahmed 1991」と略す]を参照。また Winins は「ブルックヘン生まれの宝石商人 Jacob van Couteren の記述に基づいて、主として一七世紀前半のローアを中心としたダイヤモンド取引について扱っている。George Winins, "Jewel Trading in Portuguese India in the XVI and XVII Centuries", *Indica* 25 (1968) [以下「Winins 1968」と略す]参照。
- ⑤ ユタヤ人によるダイヤモンド交易の歴史に注目した研究としては Gedalia Yogev, *Diamonds and Coral, Anglo-Dutch Texas and Eighteenth Century Trade* (New York, 1978) があせ。
- ⑥ 現在、装飾用原石の大部分はロンドンの市場を経てアントワープス、アムステルダム等に輸出され、ここで研磨・加工されるといふ。
- ⑦ この鉱山については以下を参照。Relations of Calcutta in the Early

*Seventeenth Century*, ed. W. H. Moreland (Hakluyt Society, London,

1931) [史料 *Relations* ヲ 讀ム]; Jean-Baptiste Tavernier, *Travels in*

*India*, tr. V. Ball, 2nd edition, ed. by William Crooke, 2 vols. (New

Delhi, 1995); *Indian Travels of Thevenot and Careri*, tr. and ed. S. N.

Sen (New Delhi, 1949).

㊸ Tapan Raychaudhuri, *Jan Company in Coromandel, 1605-1690*

(Verhandeligen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en

Volkenkunde, vol. 38, The Hague, 1962) [史料 Raychaudhuri 1962

ヲ 讀ム], pp.171-173; L.C.D. Van Dijk, *Nederland's vroegste betrekking-*

*en met Borneo, den Solo-archipel, Cambodja, Siam en Cochinchina*

(Amsterdam, 1862) [史料 Van Dijk 1862 ヲ 讀ム], pp. 130-199.

㊹ Kristof Giamann, *Dutch-Asiatic Trade 1620-1740* (Copenhagen &

The Hague, 1958), pp. 13-18.

㊺ それぞれの品目に注目した研究は非常に多量だが、例えばは羅に關して

は、H・W・フアン・サンテン、長島弘(訳)『オシヤラールとオランダ

ドゥスターンにおけるオランダ東インド会社 一六二〇—一六六〇年

(I)』(II)『長崎県立大学論集』二二—四(一九八八)二四—三・

四(一九九一); 米に關しては、S. Arasaramam, "The Rice Trade in

Eastern India, 1650-1740," *Modern Asian Studies*, 22 (1988) 545-560.

㊻ W. Ph. Coolhaas, *A Critical Survey of Studies on Dutch Colonial His-*

*tory* (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Bib-

liographical series 4, The Hague, 1960) pp. 41-42.

㊼ クーンに關わる書簡類が中心であるため、コーンに収録された記録は

彼の在東インド期間のものに限られる。したがって本稿でも、彼が一

時帰國してゐた期間に關する情報は情報不足の感も否めなから、現段階で

は *Dagb-Register* 等の記録に基いて、可能な限りコーンの不足を補おうと

することを試みる。

史料に本誌に附した史料集のオランダ語を記す。

Coen: Jan Pietersz. Coen, *Bescheyden ontrent zijn bedrijf in India*,

ed. H. T. Colenblander, vols. 1-6, W. Ph. Coolhaas, vol. 7 in

2 parts (The Hague, 1919-53)

CD: *Corpus diplomaticum Neerlandico-Indicum*, ed. J. E. Heeres, vols.

1-2, F. W. Stapel, vols. 3-6 (The Hague, 1907-55)

DR: *Dagb-Register gehouden int Casteel Batavia want passerende daer*

*ter plaetse als oever geheel Nederlands-India, 1624-1682*, ed. C.

Heeres et al, 31 vols. (The Hague & Batavia, 1887-1931)

GM: *Generale Missiven van Gouverneurs-Generaal en Raden aan*

*Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie*, ed. W. Ph.

Coolhaas (The Hague, 1960)

Opkomst: *De Opkomst van het Nederlandsch gezag in Oost-Indie*, ed.

J. K. J. de Jonge, 13 vols. (The Hague, 1862-1909)

Plakaatboek: *Nederlandsch-Indisch Plakaatboek, 1602-1811*, Com-

plied by A. van der Chijs, 17 vols. (Batavia & The Hague,

1885-1900)

Van Dam: Pieter van Dam, *Beschryvinge van de Oostindische Com-*

*pagnie*, ed. F. W. Stapel, et al., 4 books in 7parts (The Hague,

1927-54)

Tuzuk: *Tuzuk-i Jalangiri*, ed (Sir) Sayid Ahmad Khan (Aligarh,

1864)

DFI: *The Dutch Factories in India 1617-1623*, ed. and tr. by Om

Prakash (New Delhi, 1984) (本誌特号) 一ページの国立文書館

(Algemeen Rijksarchief) 所蔵の文書のうちのインド関係箇所の英語による抄訳である。今回は筆者の力量不足のため未刊行史料を用い

ることができなかったが、今後機会があればそれらに基づく再検討を試みたい。)。

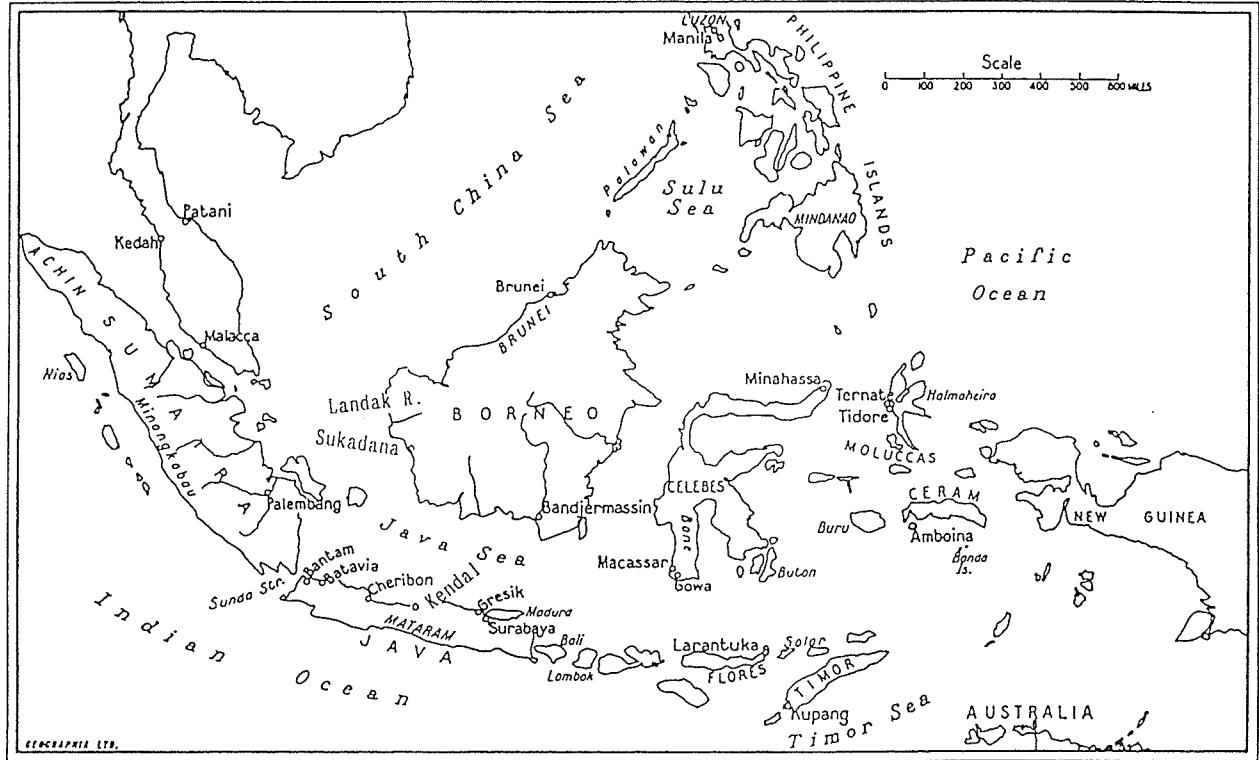
## 一 一六二〇年までの状況

### (一) ボルネオ島におけるダイヤモンド取引の開始と進展

ボルネオ島でのダイヤモンド購入に関する情報は、会社の第一回航海のときから既に見られる。一六〇二年に本国を出帆したこの艦隊は、ジャワ島西部のバンテン Banten、東部のグレシク Gresik を訪れた後、続いてボルネオ島に船を送り、スカダナでダイヤモンドを購入した。これは一六〇四年のことで、オランダ人がスカダナに姿を現したのはこの時が最初であったという [Opkomst III, 23]。スカダナは当時ボルネオ島におけるダイヤモンド取引の中心地で、その少し北に位置する原石の産地ランダク Landak (或いはランダ Landak) 川から船により輸送されてきた石を扱っていた。一六〇六年、このスカダナに会社は商館 (factorij) を設置した。その後一六〇九年から一時期、ランダク川の北にあったサンバス Sandaas での取引を試みたこともあったがこれは成功せず、クーンの頃には結局、ボルネオ産ダイヤモンドの入手先としてはスカダナの名があげられている。会社はこの地での取引で、ベンザール、ロウ、麒麟血等も得ていたが、入手される品物の中で特に注目されていたものはダイヤモンドであった。

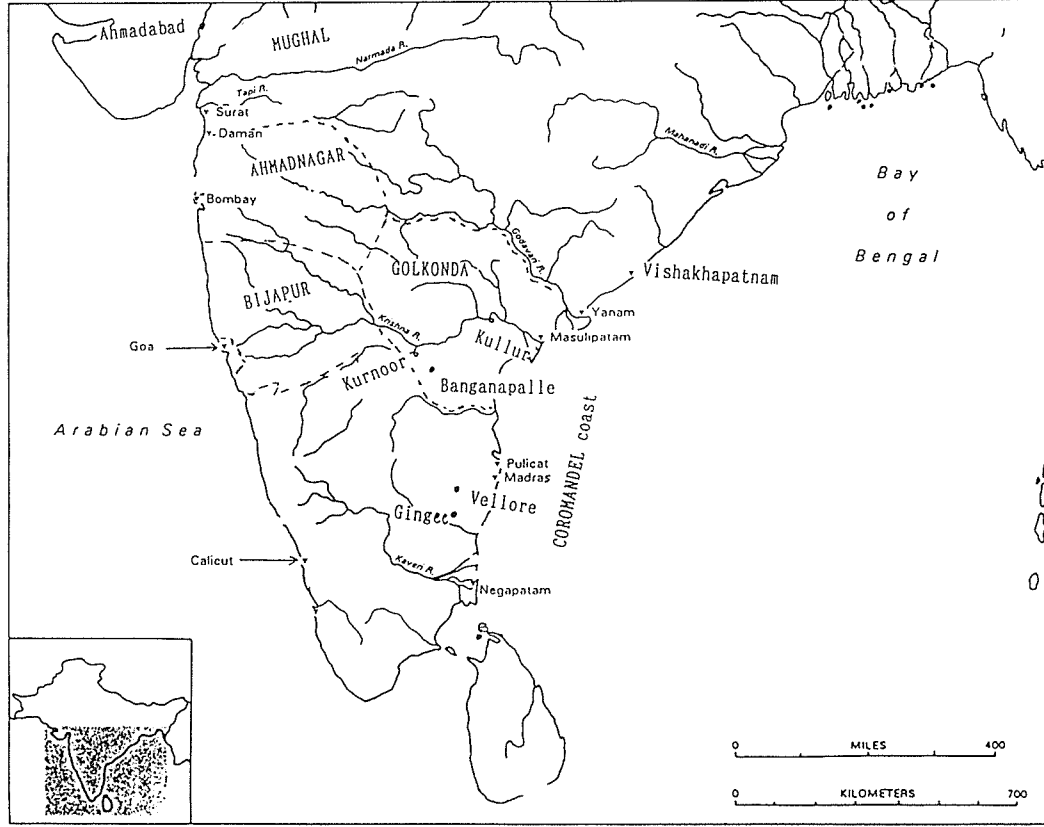
一六一〇年代の前半、会社にはスカダナから毎年ほぼ四〇〇〜五〇〇カラットのダイヤモンドが届けられていた。クーンが一六一四年一月一日付けで本国に宛てて記しているところでは、当時のスカダナにおける取引はなかなか順調で、そこには美しいダイヤモンドがあったという [Coen I, 30]。また、スカダナの上級商務員 (opperkoopman) を務めていた Everard Deyn は同年六月二九日付けの書簡において、以前に発送された積み荷の中に四六三・五カラットのダイ

The Indonesian archipelago



C.R. Boxer, *The Dutch Seaborne Empire 1600-1800* (London, 1965) 所収の地図に加筆。





ヤモンドが含まれており、さらにその積み荷の発送後スカダナでは二〇〇カラット以上の石が手に入っていたと伝えた。これらの中には九・五カラットの重さの石が一つ含まれていたが、Deyn はもっと手に入れたいと述べている。[Coen VII, 1]

しかし翌一六一五年の入手状況はよくなかった。一〇月二二日付けの書簡でクーンは「スカダナからはこの年、わずか一〇〇カラットほどしか手に入らなかった」と述べている [Coen I, 136]。そこで状況を変えようと、その後彼は何度かスカダナに対し、例えば特に用途を指定して資金を送るといった措置によりダイヤモンド取引の促進を求めた [Coen II, 138-139; 140-141; 148]。例えば一六年七月一日付けの書簡によると、スカダナに船を派遣した際手持ちの帰り荷を載せてすぐに送り返すように告げる一方で、「ただし、もしまたダイヤモンドが荷下ろしされていなくてもランダ (Landa) 川のプラウ (prouwen) が毎日待たれているなら、それらをその後一日から一ヶ月はとどめていてもよい」という条件を付け加えている [Coen II, 138-139]。それは「ダイヤモンドが最も利益の多いものと見なされているから」であった [Coen II, 148]。この年の九月には四二三・七五カラットのダイヤモンドがスカダナから送られたが [Coen VII, 181]、取引がこれで順調に回復したとは考えにくい。一七年にも購入を促す書簡は複数見られ、その年の末には「もっと多くのダイヤモンドその他の帰り荷を我々は期待していたが、スカダナで起こった厄介事 [の影響] によりランダ (Landa) の人々が来ないので、[状況の] 改善まで忍耐を持たなければならぬ」と述べられている [Coen II, 245-246; 275-276; 318-319]。この時期の入手量が不安定になった大きな要因としては、特に一四年頃からのスカダナにおけるイギリスとの競争があったようである。

一六一八年になると、二月、三月のスカダナからの報告として、その地では四三〇カラットのダイヤモンドが手に入り、さらにまだ大きな石が手に入る見込みがあることがクーンに知らされた。この知らせを受けて彼は五〇〇〇レアルの資本を送ることを約し、さらなる取引を促した [Coen II, 380]。その後数年間は再びスカダナからはダイヤモンドが順調に獲

得されていた。一九年七月八日には七三一カラットがクーンのもとへ届けられ [Coen I, 478]、一六二〇年一月には二五七・七五カラット、七月には九二一・七五カラットが得られたと本国へ報告された。同じ頃、この取引において競合していたイギリスの活動が資金繰りの悪化のために衰え、会社は以前より多くのダイヤモンドをより適当な価格で手に入れることが可能になったということである。[Coen I, 510; 572]。

一方で、当時クーンからはこの取引に関わった商務員たちの行為に対する苦情も出されていた。例えば、一六二〇年七月九日付けで、Joseph Jansz. de Natlaer<sup>③</sup>に宛てられた書簡には、それまでにスカダナへ送られた資金の現地における実際の用途や配分に対する不満を表した苦言が見られる。ここでクーンは、これから送る資金で購入すべき品について指示するだけではなく、既に送られていた金の用途についても諫めている。すなわち、スカダナでは金を「ダイヤモンドの買い占めのために取っておく」べきであって、建物の修理等にその時点で多額の費用をかけるべきではなかった、と述べているのである [Coen II, 762]。

また私貿易に対する警戒も示されている。例えば二〇年三月にクーンはジャカトラ [Jakarta] にそのころ様々なダイヤモンドが私的に持ち込まれていることを指摘するとともに、その件に自ら関わったと疑われた De Natlaer に対しては、私貿易を許したことについて謝罪を表明し、その実態を報告し、これを発見して止めさせるようにと告げている [Coen II, 622]。しかし当時社員による私貿易がごく普通のことであったことは現在では広く知られており、スカダナでの私貿易に関わった会社の人間も De Natlaer に限ったことではないものと推定される<sup>④</sup>。

このように、会社は早い時期からボルネオ島のダイヤモンドを主にスカダナを介して入手していたが、一六一五年頃から数年間、この取引が不安定になったことがあった。そしてまさにこの時期にクーンはインドの鉱山に目を向けた。一六一五年一〇月に彼は、インド南部のヴェロル Vellore 近辺での取引の可能性を探る命令を出すことを本国宛てに報告している [Coen I, 136]。そこで次に、この時のインドにおけるオランダのダイヤモンド取引への試みについて述べること

とする。

## (二) インドにおけるダイヤモンド入手への試み

オランダがインドでのダイヤモンド取引を、少なくとももある程度の規模を持って行うようになったのは、ボルネオ島でのそれよりも若干後のことである。オランダはインド進出に際して、まずその東岸にあるコロマンデル海岸を目指した。その理由は主として、そこが香料取引の際の代価となる綿布の産地であったからであり、またゴアを拠点に西側のマラバル海岸で勢力を持っていたポルトガルの活動が東岸では比較的活発でなかったからでもある。当時、コロマンデルにおけるダイヤモンドの取引にはとりわけアチエやグジャラートなどの商人たちが大いに関わっていた。オランダもこの取引に関心を持っていたが、一六一五年の時点ではまだヴェロールでの取引の可能性を探っている段階であった。

さて、このときに行われた調査の報告は「Van Dam II-2」の補遺に見られる。それには当時コロマンデル海岸における上級商務員であった Willem den Dorst<sup>⑤</sup>の署名と一六一五年二月一日の日付けがあり、主としてヴェロールの南に位置する現在のジンジ Gingee でのダイヤモンドの取引に関する情報として以下のように報告されている。

ダイヤモンドは Sansier (ジンジ) で見い出され、あるいはそこから九日乃至一〇日行程のところにある二つの村で採掘される。その一方、主だった方「の村」は Bannaganapely という名、もう一カ所は Cotocotto という名である。「両村は」徒歩で約半時間ぶん隔たっている。「鉱山は」Canau の大王の領土にあるが、ある貴顕 (edelman) によって治められており、二四乃至二五 mangeling 以上の重さのある石は全て、勘定の値引きなしに彼(王)に差し出されなければならないという条件で、年間約二〇〇、〇〇〇リアル・ファン・アアテンで賃貸しされている [Van Dam II-2, 174]。

この「Bannaganapely」及び「Cotocotto」と記されている二つの村は、それぞれ現在のバンガナーパッリ Banganapalle<sup>⑥</sup>及び Cottacote を指すのであろう。後には、「バンガナーパッリ礫岩 (Bunganapully conglomerate)」と呼ば

れるダイヤモンドの含まれた礫岩が広く分布していると言われて、多くの鉱山が発見された。<sup>⑦</sup> ジンジよりもかなり北に位置するこの鉱山は当時ビージャプル、ゴールコンダ両王国の境界付近にあったと考えられる。<sup>⑧</sup> この報告では続けてダイヤモンドの取引に関する当時の状況が述べられている。

「ダイヤモンドは」 mangeling 単位で売られる。九 [mangelin] は一 pagode に相当する。すなわち重さにしておよそ二 engelsche (engels) であり、その価格は石の「売られる」時期、良<sup>9</sup>、そして完全<sup>10</sup>なる。<sup>⑨</sup> [Van Dam II-2, 174-175]

ここでのダイヤモンドの取引は、殆どビージャプル・ゴアなど各地の商人や代理商らによる独占状態であったという。しかし Den Dorst は若干の取引の具体例をあげて、会社も年に「一〇〇、〇〇〇レアル以上あれば」取引に参入できると述べている。

さらに Den Dorst はこの後真珠の取引について記している。というのも、この辺りでは「大きく美しいものであれば、真珠がもつとも価値あるものとされているので、「適切な条件でこれをダイヤモンドと交換することができるだろう」から、すなわち資金源としての可能性を見出したからであった。彼の報告は真珠を売る際に注意すべき具体的な条件に及んでおり、<sup>⑩</sup> 調査の目的が主として取引の可否とその取引に見込まれる利益の見積もりを報告することであったことを窺わせる。

Den Dorst からはジンジ近辺での取引に関する情報として上のような報告が送られたが、実際の取引のためにまず会社が人員を派遣したのはビージャプルであった。一六一五年九月、その国における取引の許可を得るためにパレアカッテの上級事務員 Leonard Wolff<sup>⑪</sup> が派遣された。しかしその後まもなく、Wolff の不正行為が露見してこの試みは挫折してしまった。この件に関してコロマンデルの長官 (directeur) であった Hans de Hase は一六一六年六月五日付けの書簡で、Wolff をバンテンに送り返すことを告げるとともに、Wolff は「重役の方々 (de heeren bewinthebberen) を欺き」「ダイヤモンドのサンプルをもたらしもせず、約八〇〇パゴダを手の者たちと共に使い込み使い果たしてしまった」とその罪状

を述べらる。De Hase は、Wolff の代理として Pieter Gillisz. に「非常にダイヤモンドに造詣の深い」ダイヤモンド研磨工を一人つけて派遣したが、結局大して成果を上げることはできなかった。[Coen VII, 95-96]

さて、コロマンデルから手に入れられるダイヤモンドについての情報を得て、一六一六年三月に会社は六〇〇乃至七〇〇パゴダ分のダイヤモンドの購入を決定し、クーンも同年一月に鉾山への人員の派遣を命じた [Coen II, 211]。しかし、ヴィジャヤナガル Vijayanagar 王国 (一三三六—一六四九) 領内における内乱やムガル Mughal 朝 (一五二六—一七〇一) 一五五五—一八五八) のデカン遠征等の戦乱、コロマンデルにおけるオランダとゴールコンダ領内の現地有力者との不和といったことに影響され取引はなかなか進まなかった。こうした状況がしばらく続き、一九年九月にはヴィンジャーパトナム Vishakhapatnam にいた Andries Soury からクーンへ宛てて、ジンジ産のダイヤモンドの得られる可能性は非常に少ない、ということが報告された [Coen VII, 470]。

以上のように、一六二〇年以前には会社が入手していたのは主にボルネオ産の石であり、まだ本格的にインドでのダイヤモンド取引は行われていなかった。また、インドでの取引を意図した調査が行われたのは、スカダナでの取引に一時問題の生じていた時期にあっている。この調査の結果はインドでの取引の即時開始に結びつくものではなかったが、その後デカンにおける鉾山発見の報を受けてこの取引に対する関心は一層高まることになる。そこで次章では、この鉾山の発見によって会社のダイヤモンド取引が如何に変化していったのかについて述べることにしたい。

- ① 一六〇九年にサンバスとの間に結ばれた条約によると、サンバス側は「スペイン人、ポルトガル人、イギリス人、フランス人、或いはいかなるその他のヨーロッパ人」に対しても、「些かの取引や居住地を認めたり許可したりしない」とし、これに対して会社は、ランダタの人々がスカダナではなくサンバスに取引に来るなら、サンバスで取引を行う、とどうにもないとした [CD I, 73-74; Opkomst III, 302-304]。しかし、数年後にサンバスとのこうした友好的な関係は失われた [Van Dijk 1862, 143-146]。
- ② 本稿の引用部分では以下( )で前の語句の説明を、「」で筆者による補足を示す。
- ③ 一六一六年七月、三年の予定でスカダナに送られた下級商務員(onderkoopman)。生活態度が悪く同年のうちに一旦ジャカトラに呼

- び戻され、一六一九年に再びスカダナに送られたが、結局十二年不行為のため辞めさせられたという。[Coen VII, 869]
- ④ 事実、私貿易はその後も続けられており、例えば一六三二年には社員に対し私貿易、特にダイヤモンドや金、銀などの取引を禁じる布告が出された [Plakaatboek I, 256]。
- ⑤ 一六一五年三月三〇日から一七年までパレアカッタ Palacatte の上級商務員をよめた [Coen VII, 862; Van Dam II-2, 176]。
- ⑥ Banganapalle: 北緯一五度一九分東経七八度一七分、Cottacote: 北緯一五度一九分東経七八度五四分。
- ⑦ C.D. Maclean, *Manual of the Administration of the Madras Presidency*, 3 vols., 1885-93 (reprint in 1987-90) [以下 MAMP と略す], vol. 1, p. 309; vol. 2, p. 30.
- ⑧ 一方「Canati の大王の領土」がカーナティック地方（アーンドラ・プラデーシュ州南部からタミル・ナードゥ州中部）を指すとすると、ここには若干の混乱が生じる。そのため「Stapel」も述べているように、この後 Den Dorst が記してある「Visiapour（ビージャプル）・Van・Sinsier（ミンジ）・Velour（ヴェロール）の商人たちや代理商たち」が集まってくる場所が現在のどの町にあたるのか同定

## 二 一六二〇年代の状況

### (一) 「コロマンデルのダイヤモンド」と鉱山の発見・取引の開始

この節では、鉱山の発見とその直後の状況、及び「コロマンデルのダイヤモンド」をめぐる会社の対応について述べる。

- することは難しい。
- ⑨ mangelin はダイヤモンドの重さを表す重量単位。タミル語の *manjalai*（穀類種子の意）から。若干の差異はあるがほぼカラットに相当するとされる。engels は貴金属・宝石類に用いられた重量単位。pagode は当時用いられていた硬貨で、オランダの六フルデンに相当したとされる。
- ⑩ それによると「二つの形と大きさをもったものが一六、八、四、或いは少なくとも二個」はあるようにしなければならないという。これは装飾品として加工される際に求められた条件であったと思われる。
- ⑪ コアに数年間住んでいたことのある宝石商人だが、一六一五年八月一七日に上級商務員としてパレアカッタに来て、ビージャプルにおけるダイヤモンド取引に関する副責任者となった。不正行為と酒癖の悪さのため彼は一六一六年六月にバンテンに戻され、それからまもなくエンガノ Engano 島でこの船が座礁した後に死んだ [Coen VII, 862]。
- ⑫ 一六〇九年以降、バンテン、グレシク、ジャンビ等の商館にいた後、一六一九—二二年の間コロマンデルの副総督 (vice government) を務めた。一六六四年ロツテルダムで没 [Coen VII, 858]。

「コロマンデルのダイヤモンド」とはマスリパトナム Masulipatnam、パレアカッテ等コロマンデル海岸の港から積み出されたダイヤモンドを指す。これらを産出する鉱山自体は内陸に位置していたが、ランダクで採取されていた石が「スカダナのダイヤモンド」と言われたように、取引の名と結びついた呼び方で呼ぶものである。

さて、発見された頃のクルール鉱山については、一六一八年から二二年までマスリパトナムにいたイギリス東インド会社の William Methwold が実際にここを訪れて残した記述 [Relations, 30-32] がよく知られているが、この旅の際、彼には二人のオランダ人が同行していた。そのうちの一人は既出の Andries Soury であり、一六一九年七月以来コロマンデル海岸の副総督の地位にあった [Coen II, 586]。そのため、会社はこの鉱山に関する情報を直接現地を訪れた人物から手に入れることができたことになる。また、もう一人は Adolff Thomasz とごう「フリーの商人 (Free Merchant)」であるが [Relations, 31]、彼は既に約一〇年間会社に属して主にコロマンデルに滞在していた人物で、一六二〇年七月に自由市民 (vrijburger) となっていた<sup>①</sup>。

オランダ本国にこのダイヤモンド鉱山の発見が知らされたことは、一六二二年一月八日付けのクーンによる報告から確認することができる [Coen I, 611]。それによると、「Maslipatan (マスリパトナム) の地において、およそ三日行程のところにある Baminganne Pully とごう名の村の近くに新しいダイヤモンド鉱山が発見され、それは非常に大きな利益がある」ものであったという。これに続いて、マスリパトナムから送られてきたダイヤモンドを本国に送ることが告げられ、それが取引に値するものか否かの判断が求められている。

また、Methwold は彼の訪れた鉱山の地名を明確に記してはいないが、クーンのこの報告では鉱山近くの地名として「Baminganne Pully」という名が記されている。これは先述のバンガナーパリのことを指すと思われる<sup>②</sup>。鉱山発見の時期については一六二二年一月二九日付けの書簡において Soury が「およそ一五乃至一八ヶ月前」と述べているというので、おそらく一六一九年の後半のことと考えられる [DFI, 147-149]。



Soury によるとこの鉱山は、地方の有力者に対して採掘権とともに貸し出され、借り主は管理・運営を任される代わりに年間の貸借料を払い、八カラット以上のダイヤモンドについては無償で主君に献上することになっていたという。これはかなり大きな鉱山と見なされたので、当時インドにおけるダイヤモンド取引の可能性を探っていたオランダにとって、この発見の情報は何よりの収穫であったろう。そして以後「コロマンデルのダイヤモンド」は会社にとって一層の関心の的となった。

先述の書簡において Soury は、この鉱山の発見と自らの訪問によって得られたこれに関する見聞について報告するとともに、マスリパトナムで購入した一九三片のダイヤモンド七〇四・二五カラット相当をジャカトラへ送ったことを告げている [DFI, 147]。さらに同年五月二七日にはマスリパトナムから、実に一、七八八カラットものダイヤモンドがバタヴィアへ送り出された [Coen VII, 748; DFI, 162]。これ以前に主としてスカダナにおいて会社が入手していた量を鑑みると、この時送られた石は相当大量であったといえる。

鉱山を訪問した際の見聞に加え実際に大量の石が得られたために、この鉱山の埋蔵量は相当に豊富なものと期待されたところが、その年の八月になると、鉱山は閉鎖されてしまい、それによってダイヤモンドの価格は三五パーセント上昇したという情報が Soury の元に入っている [DFI, 166]。そして一〇月になると、もはやマスリパトナムにはこの鉱山からのダイヤモンドが殆ど届けられなくなってしまった<sup>③</sup>。

このとき鉱山が閉鎖された理由は、Soury によると、ムガル朝及びビージャプルからのダイヤモンドに対する要求が大きかったためであるという。当時の状況を見てみると、この鉱山より少し西に位置するクルヌール *Kurnool* 周辺の地方の事実上の支配者とビージャプルとの間で戦争が行われており、この世紀の初めからはデカン地方への拡大を試みるムガル朝とマリク・アンバル *Malik Ambar* の間<sup>④</sup>で戦いが繰り返されていた。これに先立つ戦いではマリク・アンバルが降伏し、両者の間で一時的な休戦が成立していたが、ムガル朝はこの戦いの際にマリク・アンバルを援助したビージャプルと

ゴールコンダに対しても賠償を要求してきており、その要求額はゴールコンダに対するものが最も多かった。そして、この賠償を取り立てるためゴールコンダのスルトン、ムハンマド・クトゥブ・シャー Muhammad Qutb Shah (在位一六一二—一六二六)のもとには、ムガル朝からの使いが送り込まれていた。<sup>⑤</sup> こうした状況から、この時の閉山の背景には、周辺地域で行われた戦争によって採掘に直接の危険が及んだこと、広域に渡り交通路が遮断され商業活動が妨げられたことの影響のみならず、鉱山の正確な位置やその豊富な鉱脈に関する情報をムガル朝側に知られることに対するゴールコンダ側の警戒もあつたのではないかと考えられる。<sup>⑥</sup>

ともかく、この閉山によってインドにおける取引は影響を受け、コロマンデルへの供給量も減少して価格が上昇した。しかし Souryらは直ちにダイヤモンドの取引を抑制しようとはしなかった。むしろ、八月に最初に閉山を報告したにもかかわらず、その一ヶ月後にはアムステルダムに宛てて、ダイヤモンドの購入の努力をしそのために資金を充てる方が、注文の減少していく他の品に充てるよりもよい、と進言し、純度の高いダイヤモンドの価値を力説したという [DEI, 17]。これは先に送ったダイヤモンドに対する本国の評価と指示を待っている間のことであるが、このことから Soury がダイヤモンドの取引を推進すべきと考えていたことがわかる。一方、東インド総督としてバタヴィアにあったクーンは、当時コロマンデルにおけるダイヤモンドの購入についてはより慎重な姿勢を示していた。この年の八月と一〇月に彼は Soury に対して、本国からの指示が届くまでその購入を控えるよう告げている [Coen III, 75; 96]。<sup>⑦</sup>

しかし、クーンはダイヤモンドの購入全般に対して消極的であつたわけではない。同じ年の五月に彼はスカダナに対してはその積極的な購入を促しているからである [Coen III, 46]。購入を控えるようにとのコロマンデルへの指示は、他の商品の調達及び他地域における取引とのかねあいを考慮して出されたものであつたと考えられる。当時、コロマンデル海岸は会社にとって、香料を中心とする様々なものを東インド地域内において購入するために必要とされた、各種の織物 (Kleden)、とりわけリンネル (lij(n)waten) や綿布 (catoeen) の、それに米を中心とする食糧などの生産地或いは調達地

として位置づけられており、しかもこうしたものの購入資金を減らすわけにはいかなかった。そこでこの年の一月、クーンは本国への報告の中でコロマンデルへの資金の増額を訴えた。このとき彼は、本国からコロマンデル向けにと送られた五万六〇〇レアルに、バタヴィアからの一二万レアルを追加して送金したが、それでも必要額に対しては少なすぎた金額であるとして、コロマンデルには毎年二〇万乃至は三〇万レアルを送るよう本国に要請している [Coen I, 671; DFI, 185-186]。こうしたことから、東インド総督としてのクーンには、会社の広範囲に及ぶ取引の全体を見渡した上で、その取引にいかほどの利益があるのかを見積もり、他の品々の需要をも考慮して予算の配分を行う必要がある、そのために彼はダイヤモンドへの過度の出費を抑制する立場をとっていたと考えられる。

さて、閉山された鉱山はその後一年以上の間再開されなかったという。その間中、コロマンデルからの報告は鉱山が再開されないことを繰り返し告げており、再開が待たれていたことを窺わせる。バタヴィアからの指示は依然として、基本的にはダイヤモンドの購入については本国の方針が明らかになるまでは控えるようにということであった。ただしこれには、特に良質で価格も妥当なものであれば購入すべきだ、という条件が付されていた。その後ようやく本国から、ダイヤモンドの購入を進めるようにという指示が届いた。一六二二年七月七日付けで、Souryと彼の後任となったVan Uffelenとともに、この年の五月と六月に本国から来た船が総額三〇万フルデンの資本を積んでコロマンデルに到着し、ダイヤモンド購入が非常に奨励されたと述べている [Coen VII part 2, 985-986, 993; DFI, 208-209]。

この頃、鉱山の閉山に伴って供給量が減少したためにダイヤモンド価格の高騰が見られた。Van Uffelenはこの七月の書簡で、それらの価格は一年乃至一年半で二倍という高値になって、それをアチェ人 (Achijer) など様々な人々が手に入れようとしていると伝えた。こうした中でクーンはマスリパトナムに対して、「資金の許す限り、また奴隷と「アジアの」域内交易 (d'Inlandschen handel) にとって最も必要な織物の購入を縮小せずには限る限り多く「のダイヤモンド」を送るよう」と指示を出した。ただしその際にも、本国の意志に従って「十分に純度の高い (suyvere) ダイヤモンドだ

け」を購入し、送るようという条件が付されていた [Coen III, 209]。

以上のように、「コロマンデルのダイヤモンド」はクーンにとっては、あくまでも織物などその地で仕入れるべき他の様々な商品を従来通り購入した上で、資本の点から購入が可能ならば買えばよいという程度のものであって、そうした品々の調達に支障を及ぼしてまで購入を奨励されるようなものではなかった。この点については、ダイヤモンドがその地における取引の中心であったスカダナの場合とは些か異なる。一方、実際にコロマンデルにいた商務員などの対応は、そうしたバタヴィアの姿勢とはまた若干違っていたようであるが、この点に関しては次の節で見るようになる。

## (二) 「コロマンデルのダイヤモンド」の取引の経過

上述のように大鉱山の発見を受けて会社の方針が定まり購入が奨励されたにもかかわらず、実際の「コロマンデルのダイヤモンド」の入手は困難な状況が続いていた。その間待たれていた鉱山の再開の見込みについて、Van Uffelen は既出の一六二二年七月の書簡で以下のように述べている。

滞在が」鉱山がそんなにも長い間閉鎖されていた根本的な理由となりました。彼はしばらくの間ゴールコンダに滞在しており、「その滞りが」鉱山がそんなに長い間閉鎖されていた根本的な理由となりました。「彼は」三乃至四ポンドのダイヤモンド——全ての石がそれぞれ三〇から五〇カラットの重さのもの——を、その他の多くの高価なものとともに持っていったと言われています。ある人々の意見によれば、上述の鉱山は雨季に続いて、すなわち次の一月頃には開かれる可能性があるということですが、それについては時が経てば明らかになるでしょう。 [Coen VII part 2, 986]

その後何度か「まだ再開されない」という報告が出されてから、翌一六二三年一月一五日には Van Uffelen によって再開の見込みがあることを伝える書簡が記された。それによると、まだ実際に再開される前から現地では早々にそれに備えた様々な動きが見られていたことがわかる。例えば、鉱山が再開されるらしいという情報が確かになると、それ

だけで既に鉾山に向かつて人々がやってきているといい、各地の商人たちが再開を待ち望んでいた様子がかがえる。またコロマンデルの商館でも、他の契約を節減し始めるなどして予算を調整し、購入資金の確保に努めた。しかしそれでも資金不足であるとして Van Uffelen は、できるだけ早くさらに多くの資本を送ってダイヤモンドの購入を進めることができるようにしてほしいという要請を出している。コロマンデルでこうした準備が前もって進められた背景には、この鉾山の再開山に対する不安感があった。再び閉山された場合容易には再開されず、またいつでも適当な価格で石を入手できるとは限らない、と考えられていたのである [Coen VII part 2, 1065]。

そしてそれからほどなくこの鉾山は実際に再開されたという。一三年四月二三日に Van Uffelen は本国に宛てて、二ヶ月ほど前に鉾山が再開されて今後のダイヤモンドの供給の見通しも明るくなったことを伝えており、この書簡と同時に送られた積み荷の中にも二三九カラットのダイヤモンドが含まれていた。また彼自身も六四カラットを鉾山で、また八八・五カラットをバニヤー (Pattana) を通じて購入したと述べている。さらにその後の供給量も豊富であろうと見込まれており、他にも八六・五カラットの原石が獲得されていた。ただし、当時ダイヤモンドの仲買をしていた商人が皆鉾山へ行ってしまうっており、マスリパトナムでの入手が困難な状況であったため、取引を進めるためにダイヤモンド商人と鑑定家が一人ずつ鉾山へと派遣された [DFI, 247-249]。

鉾山の再開によってようやく「コロマンデルのダイヤモンド」の取引も順調に進み始めるかと思われたその頃、今度は逆に、ヨーロッパにおける戦争の激化のため本国から売上の減少を伝える書簡が届けられた。そこで、第五代東インド総督（一六三三—二七）となっていた De Carpenter は再び購入を抑制するように指示を出した。しかし、鉾山再開の情報を得た本国ではその後再びマスリパトナムに対してダイヤモンドの購入を推奨する旨の指示を出し、同時に当初送金する予定であった一五万フルデンの資金に加えて、ダイヤモンド購入のためさらに一〇万フルデンを上乗せしたという [DFI, 251; 280-281]。

その後しばらくは会社は順調に石を入手することができた。例えば、一六二四年一月三十一日にバタヴィアを出帆し本国へ向かった船団のうちの一隻には四〇七・七五カラット分のダイヤモンドが積み込まれていた [Coen VII part 2, 1087; DR 1624-29, 9]。詳しくは次節で述べる予定であるが、二二年から二四年の間スカダナからのボルネオ産ダイヤモンドは殆どバタヴィアに届けられない状況であったため、このときの帰りの荷のうち的大部分は「コロマンデルのダイヤモンド」であったと考えられる。また、二四年三月にはコロマンデルからバタヴィアに一五六一カラットもの量が届けられ、これは全て翌年一月に本国へ送られた [Coen VII part 2, 1095; DR 1624-29, 33]。

しかし二五年になると再び入手は困難になった。例えば九月にコロマンデルからバタヴィアに着いた船は、「ゴールコンダ王国にあるダイヤモンド鉱山がストップされた」と伝えた [DR 1624-29, 160]。この年の状況については翌年二月の時点で「ダイヤモンド鉱山は商人たちに対しては閉ざされ、そこでは王が私的に採掘させた。またさしあたっては、「鉱山が商人たちに」開かれることはありそうもなかった」とまとめられている。こうしてコロマンデルでは、ダイヤモンドの入手は非常に困難になり価格も高騰してしまった。しかし一方、同じ頃ムガル朝の大使 (d'Ambassadeurs) が「ゴールコンダからダイヤモンドと金からなる信じられないほどの財宝」を持って行ったともいわれている [GM I, 186-187]。こうしたことから、鉱山は数年前のように閉山されたわけではなく、採掘自体は行われていて、ただ運営の形態が変わってスルタンの直営という形で採掘されるようになったと考えられる。先の再開にあたってゴールコンダには利益の独占を図り、次のように鉱山の運営形態を変える意図があったと伝えられるからである。

我々は以下のようにも聞いています。既に王によって指名された者がその鉱山へ向けて出発し、それ(鉱山)はもはや賃貸しされず、全てが王のために採掘されるであろう、と。そして彼(王)はまずそこからの利便を獲得し、それから商人たちに残り【ダイヤモンド】を売却するはあさつと [Coen VII part 2, 1069]。

これは Van Uffelen が鉱山再開の見込みを伝えた先述の書簡の一節である。この後再開された時点では、鉱山の運営

は以前のように貸し出される形で行われたとされているので [DFI, 248]、再開後しばらくしてから先の意図を実行に移したとも考えられる。

しかしこの形は長くは続けられなかった。一六二六年末までには「ダイヤモンド鉱山は再び開かれて、多くのダイヤモンドがかの地（コロマンデル）で現れ始め」ていた。ただしそれらは依然として高値であり、またビージャプルとの間で戦争が起るとすればこの鉱山はまた閉じられてしまうだろうという懸念もあった [GM, I, 206]。

一六二七年にはこの鉱山は再び「以前の借り主に賃貸しされ」、もとの運営方法に戻ったようであるが、ダイヤモンドの価格はオランダが期待したほどには下落しなかった [Coen VII part 2, 1178; 1184]。その翌年以降も鉱山は開かれてはいたが石の値段は依然として高いままであって、思い通りに入手することは容易ではなかった。例えば二九年八月付けの書簡と共にコロマンデルから送られたダイヤモンドはわずか六三カラットであって、しかも以前と同じ価格ではもはや入手できなかった [Coen VII part 2, 1761]。三〇年代に入っても、飢饉や戦争により鉱山への交通が困難であったり、鉱山自体が「非常に乏しい利益しかあげておらず」、「石は」どれも皆あまりにも高い」値段であったりして [GM, I, 523]、「コロマンデルのダイヤモンド」の入手状況はなかなか好転しなかった。

以上のように、ゴールコンダの「新鉱山」は発見後間もない頃から多くの期待と関心を集めたが、その後約一〇年間、閉山や再開、商人の締め出し、近隣の国々との戦争等による様々な影響を受けたため、実際に供給されたダイヤモンドの量も価格も非常に不安定な状態が続いた。時には大量の石が出回ることもあったが、そのような場合にも、各地の商人たちとの競争、石の値段の高さ、購入資金不足等の理由により、買い付けを進めることは容易ではなかった。しかし、これまでこの頃からインドでもダイヤモンド購入が進められるようになったといえる。では、その頃もう一方の入手先であるスカダナの方は如何なる状況にあったのだろうか。次節では、この点について見ることにする。

### (三) スカダナ

一六二二年、スカダナにおける入手量は引き続きある程度の水準に保たれており、年末には三一七カラットのダイヤモンドがバタヴィアに届けられた [Coen III, 124]。この年には、二(一)でも述べたように、インドにおける大鉱山の発見の情報と共にその鉱山から大量のダイヤモンドがもたらされたため、オランダが入手した量は非常に豊富であった。しかし、その翌年スカダナを襲ったある事件のため再び情勢は変化する。

一六二二年五月、それまでジャワ島東北岸の港市国家スラバヤ Surabaya の保護下にあったスカダナは、中部ジャワを中心に当時勢力を拡大しつつあったマタラム・イスラム Mataram Islam の軍——正確には中部ジャワ北岸のケンダル Kendal の Tumenggung Bauraksa から送られた軍であるが——による襲撃を受けて、占領されてしまったのである。この襲撃の際、スカダナの町は破壊され火を放たれたため、会社も商館を焼失するなどの甚大な被害を被った。しかしバタヴィアではその被害状況がすぐにはわからず、会社は翌月、「我らの同胞、金、商品及びダイヤモンドがどうなったのか」調べるために船を送り [Coen II, 204-205 ; Coen III, 873; 878-879]、その結果以下のような情報もたらされた。

ケンダルの人々がスカダナに来たとき、我らが同胞は金、銀及びダイヤモンドをひとつの壺に入れて埋めました。……スカダナが占領されてケンダルの人々が再び去っていった後で、我らが同胞はまたその町に戻り彼らの壺を掘り出しました。スカダナの *gouverneur* の館に残っていた布その他の品々は持ち去られ、ケンダルの人々にとられました。 [Coen I, 740]

マタラムによるスカダナの占領はその地における取引を衰退させたため、会社はそれに対処しなければならなかった。ダイヤモンドの獲得についてのコロマンデルでの方針に変化が見られたときがまさにこの時期に一致する。すなわち、クーンがそれまで見合わせるよう指示していた「コロマンデルのダイヤモンド」の購入を促進するように告げたのは、既述のように、この年七月二二日付けでマスリバトナムに宛てて送られた書簡であった。これは本国の購入促進の方針に従



ったものであるが、同じ書簡の中で彼は次のようにも述べている。「Kendaal (ケンダル) の gouverneur (Baureka) がプララムのためにスカダナを略奪したので、目下そこからはダイヤモンドが手に入らないだろうということがほぼ明らかである」[Coen III, 209]。このことからコロマンデルでの取引促進の背景には、先に本国へ送られたダイヤモンドが好評を博し取引を指示されたことのみならず、スカダナでの入手困難という事情もあったと考えられる。

その後マタラムとの交渉を経て、衰えていたスカダナでの取引を再開させる動きが現れた。一六二五年七月一三日にはバタヴィアからスカダナに向けて、「その地におけるダイヤモンド取引の促進のため」船が送られた。このときには同時にベゾールやロウ、ラタン、それに米といった品々の取引を行うこともその目的に含まれており、少なくともこの時点では、スカダナとの間の取引は全般に以前ほど活発ではなくなっていたことを窺わせる [DR 1624-29, 178-179]。この船は約三ヶ月後の一〇月二〇日、無事にバタヴィアに帰還し一〇ラスト<sup>⑩</sup>の米・ロウ等の他に、「ほんの少しのダイヤモンド」を運んできた。まだスカダナでは住人が減少していて少ししか取引を行うことはできなかったが、「Laudansen (ランダクの人々) がそのヤハト船の到着前にそこを再び出帆した」というので、ランダクとスカダナとの取引もこの頃には再開されていたようである [DR 1624-29, 209]。

さらに二六年、二七年と繰り返しスカダナへ船が送られた [DR 1624-29, 204, 324; Coen V, 58]。一六二八年には「ヤハト船 Cotchin 号によって Succadana (スカダナ) から六一九片のダイヤモンド、重さにして三〇五・五カラットが得られた。そしてこのようにこの取引は大して価値がない【ので】、そちら(スカダナ)の方面へはもはや【船は】送られなかった」[Coen V, 113]<sup>⑪</sup>。その後一六三〇年に商務員が訪れてからしばらくの間、スカダナとの取引は途絶えた。三五年頃から、スカダナの人々がダイヤモンドやベゾールをバタヴィアまで持ってくるようになり、取引も再開されるが、それでも以前のように商館が設置されることはなかったという [Van Dijk 1862, 189-190]。

以上のように、スカダナでのダイヤモンド取引は一六二二年のケンダルによる襲撃のためにしばらくの間滞ったことが

あり、二五年頃から再び促進されるようになった。これを(一)(二)で見たコロマンデルの取引の推移と重ねてみると、コロマンデルでは二三―二四年には多額の費用も送られて取引状況も比較的良好であったが、二五年には一時期市場への石の供給量が減少して価格の高騰が見られた。このことから、会社はコロマンデルでの供給が困難になった頃にスカダナでの取引再開を試みたことになる。このように、オランダはインドでの原石の購入を始めてからも、スカダナでの取引をやめなかった。従来の研究では、インドばかりがダイヤモンドの産地として注目されてきたが、以上のことから一七世紀初めのオランダの原石の取引においては両産地が共に重要であったといえよう。双方が相互に補完し合うことによって、原石を継続して入手する試みが可能となり、これが本国のダイヤモンド市場や研磨業の発展を支えたと考えられるからである。

では、こうして入手されたダイヤモンドは、その後どうなったのであろうか。Winiusによると、ある種の寶石の場合その需要はアジア地域内の方がむしろ多いこともしばしばで、インドやビルマではヨーロッパよりはるかに高い値で売られることも珍しくはなかったという。その一方では、一旦ヨーロッパ商人の手に入ったダイヤモンドは殆どがヨーロッパへもたらされたともいう [Winius 1988]。一七世紀初めのオランダの場合も、例えば(二)で見たように、コロマンデルで入手された一五〇〇カラットあまりのダイヤモンドがそのまま本国への帰り荷となっている。一七世紀の前半、アムステルダムはダイヤモンド原石の市場として成長し、またアントウェルペンも研磨済みダイヤモンドの取引の中心地となっていた [Lensen 1970, 89-90]。そのため、オランダにもたらされた原石の多くはこれらの二都市で取引されたり研磨されたりしたと考えられる。その一方、管見の史料の中には、アジアで売却されたダイヤモンドの事例も見られる。そこで、次章ではその具体例をあげ、そうした取引の特徴について考えてみたい。

① 自由市民については、永積昭「オランダ人東インド総督ターンの自由市民貿易振興策とその挫折」『史学雑誌』六九―二(一九六〇) 参照。

② 先に述べたようにこの周辺はダイヤモンド鉱山が多く発見された地域である。また、この辺りの地方をバンガナーパリの名で指すこともあるとさう [MAMP III, 110]。なお、この鉱山が「クルール」と

呼ばれていた所以については、その発見から半世紀ほど後の一六六三年七月三一日にコロマンデルからバタヴィア Batavia に宛てて、鉱山の近辺にあった主要な四か村のうち "gouvernement" が居所を持っている村の名が、Coeloes といい、それにちなんでこの鉱山もその名で呼ばれているのだと伝えられている [Van Dam II-2, 178-179]。

- ③ このとき再び、鉱山は「ゴールコンダ王」の命によって「最近三日の間に」閉山されたと伝えられている [DFI, 180]。これが正しい情報であるならば、八月に閉じられた鉱山がその後一旦再開され、ここでまた閉鎖されたと考えられる。しかし、たとえ短期間一時的に再開されたことがあったとしても、それによってダイヤモンドの市場への供給量が豊かになりはしなかったということだろう。

- ④ アフマドナガル Ahmadnagar 王国 (Nizam-Shah 朝：一四九〇—一六三三／一六三六) の宰相。エナオピア生まれのアビシニア人奴隷出身で、一六世紀末からのムガル朝の進出による王朝存亡の危機に台頭して、新王を擁立、ピージャブルやゴールコンダを味方に引き入れるなどしてムガル朝に対抗した。ケリラ戦に巧みで、行政改革にも努力して王国を立て直しを図り、一時的にはある程度の成功を収めたが、一六二六年五月に没し、その後一〇年ほど王国もまた滅んだ。彼にちなんで B.G. Tanaskar, *The Life and Work of Malik Ambar* (Delhi, 1978) を参照。

- ⑤ 当時のゴールコンダを中心としたネパンの情勢については H.K. Sherwani, *History of the Qutb Shahi Dynasty* (New Delhi, 1974) [以下、Sherwani 1974 と略記] を参照。

- ⑥ Lenzen はその後のムガル朝との関わりを示す事例から、閉山や採掘中止の原因はムガル朝の圧力ではなく石の価格を高水準に保つためゴールコンダ側の意図によるとしている [Lenzen 1970, 98-99]。

- ⑦ 当時本国と連絡をとるには最短でも片道六ヶ月はかかる航海を経なければならなかった。山田準「オランダ東インド会社のアジアへの航海」『東洋研究』一一〇（一九九四・二）及び「オランダ東インド会社のアジアからの帰路航海」(1) 『東洋研究』一一二（一九九四・八）参照。

- ⑧ 前者は [DFI, 167-169] に訳された書簡と同じ日付だが、Om Prakash によるとこれは別のもので、内容も異なっているという。両者を比較したところ、ダイヤモンドについての指示に関する限り、ともに購入の制限を求める内容であるが、[DFI, 168] では買い控えの基準が「特に利益の見込まれるもののみ調達」に限るとされている。この戦争とはおそらく三〇年戦争（一六一八—一六四八）のこと [DFI, 251]。また、これに先立って一六三三年二月にクーンは一時東インド総督を辞任していた。

- ⑨ Bauteka はマタラム治下のケングルのトゥモンゴン。彼はこの征服を成したことによってマタラムのスルタン・アグン Sultan Agung (第三代・在位一六一三—一四五) の妻の一人を賜った [Opkomst IV, 304]。その後一六二八年八月には、彼は軍を率いてバタヴィア攻略に向かったが、一〇月に戦死した。一七世紀前半のマタラム王国、特にスルタン・マングンの治世にちなんで H.J. de Graaf, *De regering van Sultan Agung, vorst van Mataram, 1613-1645, en die van zijn voorganger Panembahan Séda-Ing-Krapyak, 1601-1613* (Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, vol. 23, 1958) [以下、De Graaf 1958 と略す] を参照。

- ⑩ ラスト (Last) は容積の単位。ラストは三〇ヘクトリットルに相当する。

- ⑪ この時得られたダイヤモンド片の数と重さを考慮すると、一カラッ

トに満たない大きさのものが相当含まれていたと思われる。現在でこそ、装飾品としてのダイヤモンドは一カラット未満の小片をデザインして使うことが普通になっているが、一カラット以下の小粒のダイヤ

モンドまでが商品として用いられるようになったのは、二〇一〇年ほどのことである。

### 三 アジア地域における取引

#### (一) 原石の取引と研磨済みダイヤモンドの東南アジアにおける需要

ダイヤモンドの取引には鉱山地域の現地の支配者も、利益を確保するために採掘の際に制限を設けるなどの形で関わっていた。例えばゴールコンダでは、二(二)で述べたように、鉱山の一時閉鎖、商人立ち入りの制限といった手段が取られたことがあり、また一定の重さ以上の石は献上することと定められていた。更に、自領に鉱山を持たない首長や権力者たちにもダイヤモンドは大いに好まれたので、古くから彼らと取引をする宝石商人は活動していたことであろう。管見の限りでも、アチエやグジャラート等の地域からゴールコンダの鉱山へ人々が買い付けに来ていたという複数の例が見出せる。またポルトガルもインドにおけるダイヤモンドの取引には一歩先んじて関わっていた。

最初にも述べたように、ポルトガルによるダイヤモンド取引は、オランダのそれとは異なり、個々の商人によって営まれていた。一六四〇年代までポルトガル王室はダイヤモンド取引に課税や制限を行わなかったからである。また、ゴアの宝石商人は普通、自ら後背地に入ったり鉱山へ買い付けに行ったりすることはなかったため [Wirius 1983]、ゴア経由のダイヤモンド取引は、原石を鉱山からゴアまで届ける者、この原石をリスボンへ送るゴアの商人、さらにこれをアントウエルペンその他の研磨業者へもたらすリスボンの商人、というように多くの仲介者を介して成り立っていたという

[Ahmed 1991, 136-137]。

貿易独占を基本方針としていたオランダのダイヤモンド取引でも、鉱山からコロマンデルやスカダナへは仲買人等が原石をもたらずの一般的なであった<sup>①</sup>。ただし前者については、様々な理由でマスリパトナム等の沿岸部にまで石が届かないこともあり、そうした際には会社から買い付けのために鉱山へ人員を派遣して対処した例も見られた [D.F.I. 248-249]。一方ボルネオでは、当初は産地であるランダクへの航行が有効と見なされたこともあるが、スカダナの君主はこれを好まなかったため、基本的には商務員らが会社の取引のために直接ランダクに行くことはしなかった。原石は購入後まずバタヴィアに輸送され、アジア各地から集められた様々な品々と共にそこから本国へ送られた。これらの原石がアムステルダムやアントワープで研磨・加工され、取引された。

しかし中には研磨・加工された後、アジアで取引されたものもあった。特にオランダの取引に関しては、会社に対してダイヤモンドを要求した人々の例は東南アジア地域でよく見られる。管見の限りでもそうした要求を出した側として、バテンやアチェの「王 (coninck)」と呼ばれる人々が見出せる [Coen III, 443-444; Coen VII, 284; GM I, 604]<sup>②</sup>。他にも、例えば一六二二年にケンダルの Baurekka はその書簡の中で、マタラムのスルタン・アゲンが「大きくてひとつのテーブル面 (tabel) が研磨されたダイヤモンドを<sup>③</sup>買うことを望んでおられる」ので、その購入にあたって会社に助力を求めてきたことがある [Coen VII part 2, 936]。またミンカバウ Minangkabau のある首長が「彼の王 (Coninck) であるアチェ人に贈るための美しいダイヤモンドリング (diamantring)」を頼んできたことがあった [GM II, 3-4]。実際に売却された事例としては、例えば一六三四年に「シヤム (Siam) の王に対して」<sup>④</sup>ハカラットのダイヤモンドのパラゴンが七、二〇〇フルデン相当の値で売られたという [GM I, 603] 話がある。

上記のミンカバウとアチェの例のように臣下から君主への、或いは二(二)で述べたムガル朝とゴールコンダの例のように国家間での贈り物として、ダイヤモンドは両者の関係改善や関係の保持、賠償等政治上の役割のために使われたが、会社もこれを利用しようとしたことがあった。一六三九年一月二日付けの GM によると、スルタン・アゲンに対して

「六個のダイヤモンドリング (diamondrings)」が送られた際、「マタラム」のスルタン・アグン」はそれらの支払いの資金を得るために彼の土地を開き、それによって我々には、非常にすばらしいことに、米とその他のあらゆる品々について大層な便宜が得られる」だろうと考えられていた [G.M.H. 2]。しかし間もなくこれは会社の希望的観測にすぎなかったことが判明し、結局会社がマタラムとの間に和平を結んだのはスルタン・アグンの死後、一六四六年のことであった。<sup>⑥</sup>

このように、産地に近く域内交易も盛んであった東南アジア地域において、また当時オランダ以外にもダイヤモンドを扱っていた商人がいたにも関わらず (例えばアチェのように自国に原石が大量にもたらされていた場合でも)、オランダに対してダイヤモンドの注文が出されることがあった。その場合、上述のように「研磨された (gesteepd)」ものや装飾品として加工済みのものと特に記されていることが多い。当時ダイヤモンドの研磨技術についてはヨーロッパの方がアジアよりも進んでいたが、その研磨業の中心地がアントウェルペンやアムステルダムであった。本国の進んだ研磨技術はオランダにとって取引の上で大きな強みであったと考えられる。そこで次節では、オランダの取引における研磨技術や鑑定役割と重要性について考察を加えることを試みる。

## (二) 研磨技術と取引

宝石の取引からは多額の利益が得られることもあるが、その一方詐欺などの不正行為による被害を被ることもまた多かった。ダイヤモンドの場合は、カットすることにより原石の状態よりも格段に輝きが増すという性質があるため、それを巧みに利用すれば内包物や瑕のある質の悪い石でも欠点のある程度隠すことができる。一方カットされない原石の外見は大抵、若干の丸みを帯びていて水晶などと大して変わらず、また色も様々で本質を見分けるのは容易ではない。そこで買手側としては購入の際に石そのものの真価を見誤らないよう十分に注意をしなければならなかった。そのためには品質を見きわめられる専門家の目が重要であったと考えられる。

ポルトガルの取引の担い手は個々の宝石商人であったから、ダイヤモンドに関しても一種の専門家であったといっただらう。一方、コロマンデルやスカダナといった会社の取引の場においても、ダイヤモンド鑑定家 *diamantkenner* やダイヤモンド研磨工 *diamantslijper* などと呼ばれる専門的な知識や技術を持っていたと思われる人々がしばしば現れる。コロマンデルの場合は、鉱山の発見がクーンから本国に報告されたときに、取引を進めるなら鑑定家を送るようにと要請した例がある [Coen I, 611; DF, 146]。また先述したが、一六一六年ビージャプルでの取引を試みて派遣された Pieter Gillisz. には「非常にダイヤモンドに造詣の深い」ダイヤモンド研磨工が同行していたという話があり [Coen VII, 95-96]。一六二三年の再開直後のクルール鉱山に石の買い付けに派遣された鑑定家の例もある [DF, 248-249]。一方スカダナの場合について見ると、一六一〇年には Hector Roos というダイヤモンド鑑定家が送られており、一七七年にスカダナの商館の “bottelier” として送られることになった Jacop Stuyteling はダイヤモンド研磨工でもあったという [Coen III, 405; Coen II, 275]。また、(一)で述べた De Natlaer が、不正取引の嫌疑をかけられ召喚された際のような例もある。この時、スカダナにいた社員のほぼ全員が De Natlaer とともに引き揚げさせられたにもかかわらず、三人の人員だけはスカダナに残しておくよう指示が出された。そしてその筆頭には「最高のダイヤモンド鑑定家のうちの一人 (een van de beste diamantkenners)」があげられていたのである [Coen III, 125]。

ところで、一般に宝石を売却する際には原石のままでするよりも美しい加工や細工を施した方が高値で売れる。研磨技術が優れていれば、原石の欠点をカバーできるはかりでなく、付加価値も高くなる。研磨された石がヨーロッパのみならず、少なくとも東南アジアで好まれていたらしいということは(一)で既に見た通りだが、当時はインドにおいてもヨーロッパ人研磨工の技術は重んじられていた。<sup>⑧</sup>一六一八年にスーラトの商館から送られた書簡によると、ムガル朝に仕えたあるオランダ人研磨工にアフマダーバード Ahmadabad で会ったことが伝えられている。Abraham de Ruijs という名のこの研磨工はアントウェルペン出身で、「firmans (farman = 勅令) の獲得」の際に尽力してくれ、その後もムガル朝との関係

で会社を助けてくれたという [Coen VII, 317]<sup>①</sup>。また、当時のムガル皇帝ジャハンギール [Jahangir (第四代：在位一六〇五—一七) は、彼に見事な「玉座の椅子 (takht)」が贈られたとき、これを作った工匠について次のように記している。

この玉座の椅子は Humarand (巧みなる者) という名のヨーロッパ人 (Tarang) が作った。彼には金細工と宝石研磨 (hakkari) の技芸と種々の技巧 (hunarmandri) において自らに比肩匹敵する者がいなかった。「彼は」きわめて上手く作り、私 (つう) の [Humarand とつう] 呼び名を彼に賜った。 [Tuzuk, 266]

こうしたことから、ヨーロッパの研磨技術がこれらの地域において一定の評価を得ていたといえるだろう。

会社がアジアで売却したダイヤモンドの研磨作業が本国と現地のいずれで施されたのかは不明であるが、社員の中に研磨工がいたことから、現地で研磨されたものもあったと考えられる。ただし、個人の手による研磨は認められなかった [Plakatboek I, 415; GM I, 604]。これは、ダイヤモンドの取引を独占しておくために、会社が原石の入手のみならず売却の際のことを考慮していたこと、またその場合、特に研磨されているかどうかを重要視されていたことを示していると考えられる。一七世紀前半、会社はコロマンデルからの織物や米等と引き替えに特に東南アジアの香料を手に入れていたが、こうしたものの流通の分野では、会社は特にアジア各地の多くの商人たちと競合していた。しかし、ダイヤモンドに関しては研磨技術の点でオランダは彼らより進んでいたため、<sup>②</sup> 当時の会社がアジアの中で扱っていたものの中では例外的に、そこで入手したものに加工を施して付加価値をつけて売ることが可能であった。以上のような点から、ダイヤモンドの取引は研磨という技術を重要な要素としていた点に特徴があったといえるだろう。

- ① インド東南部における現地商人集団とヨーロッパ人との関係については、S. Arasatham, "Indian commercial groups and European traders, 1600-1800: changing relationships in southeastern India," *Maritime Trade, Society and European Influence in Southern Asia, 1600-1800* (Aldershot, Brookfield, 1995) を参照。
- ② 特にアチエの場合はその地の商人がインドへも数多くやってきて交易を行っていただけでなく、インド各地からの商船も数多く来航していたので、彼らによっても大量のダイヤモンドがもたらされた。例えば [DR 1624-29, 129] を参照。また一七世紀の会社についての情報をもとめた Van Dan が、当時インドとボルネオ以外では採掘されな



かったはずのダイヤモンドをアチエで手に入る主な商品の中にあげている [Van Dam II, 21]。ここから、アチエに持ち込まれたダイヤモンドの一部はここから再び他の地域に売られることがあったと考えられる。また同地の通商に関するアチエ側の史料に基づくと研究である、井東猛「十七世紀アチエにおける通商法規——港灣諸法規を中心として——」[南方文化] 四 (一九七七・七) からインド各地の商人がインド交易を行っていたことが窺える。

③ *tafel*、或いは *tafels* は「瑕のないもの」「斑点のないもの」というダイヤモンドの品質を表す際に使われる場合で、テーブル・カット (ダイヤモンドの基本的なカットの一種) を指す場合とがある。*tafel* をここではダイヤモンド結晶の八面体の一面と見なした (天然結晶の形から一面がカットされるとテーブル・カットになる)。これの反義語にあたる言葉を *punct*、或いは *punctien* とする。「瑕や斑点があるもの」、または楔形のことを指す。

④ アムタヤ Ayuthaya 朝 (一三五一—一七六七) のブラサートーン Pasathong (在位一六三〇—一五五)。

⑤ 現在では「一〇〇カラット以上の重さの形の完全なダイヤモンド」を指す言葉だが、ここでは重さに関わらず形がよいものを意味している。

⑥ 当時、会社はマタラムと数年に互って捕虜の引き渡しを巡る交渉を行っており、その過程の中でマタラムが要求したものの中大砲やダイヤモンド等があった。[De Graaf 1958, 241-246] 参照。またこの GM の記述から会社にはその交渉におうて交易面での利益を得る意図もあったことが窺える。

⑦ *De reis van de vloot van Pieter Willemz. Verhoeff naar Azia, 1607-1612, 2 vols.* (The Hague, 1972), vol. 2, p. 255.

⑧ 当時のインドにおけるダイヤモンドの採掘から研磨までの技術については次を参照。A・J・カイサル著、大東文化大学現代アジア研究所監修、多田博一・篠田隆一・片岡弘次訳「インドの伝統技術と西欧文明」[平凡社、一九九八] 一四五—一五〇頁。

⑨ De Duijs について John Jordain, Thomas Roe も述べている。John Jordain, *The Journal of John Jordain*, ed. William Foster (Hakluyt Society, 1905), Thomas Roe, *The Embassy of Sir Thomas Roe to India*, ed. William Foster (New Delhi, 1990) [以下、Roe の略記]。[Coen VII, 317] について De Duijs について「五問 Achabars (第三代ムガル皇帝アブデル Akbar : 在位一五五六一—一六〇五) に仕えられた」と述べられているが、Foster や Coolhaas によると当時彼は Prins Khurram (後の第五代ムガル皇帝シャール・シャハーン Shah Jahan : 在位一六二八—一五八) に仕えていたとされる [Coen VII, 883] [Roe, 168 n.]。また Van den Broeck のある報告によれば、当時彼は「少なくとも一二年」の宮廷における宝石細工人 (juwelier) であった」と述べられている。Pieter van den Broek in *Azic*, ed. W. Ph. Coolhaas, 2 vols. (The Hague, 1962-63), p. 385 参照。また Om Prakash によるとこの記述は「一六二〇年の日付があるが実際には一六一五年の記述に基づいて一七一年に書かれたものである」という [DFI, 132]。これに従うと、De Duijs がムガル宮廷に仕え始めたのはアクバルの晩年かジャハーンキールの治世の初めということになる。

⑩ S. Arasaram, *Maritime Trade, Society and European Influence in Southern Asia, 1600-1800* (Aldershot, Brookfield, 1995) 所収の諸論文を参照。

⑪ したがって、会社はむしろ同国人や他のヨーロッパ人による私的な

研磨や取引に警戒しなければならなかった。ポルトガルのアジア域内でのダイヤモンド売却についてはよくわからないが、個々の商人による取引の場合、商人が同時に原石の買い付けと研磨を行うか、原石を

入手できる商人や研磨工と非常に緊密な関係を持っていなければ、会社に出された上記のような注文に応えることはより困難であったと思われる。

## おわりに

以上に述べたことは次のように要約することができる。

オランダ東インド会社によるダイヤモンドの購入は、まずポルネオ島北西岸スカダナを中心に始められ、一六二〇年代にコロマンデル海岸を積み出し港とするインド産のものへと拡大していった。両産地のダイヤモンドを比較すると、一般にポルネオ産のものは品質がよく、一方埋藏量・産出量についてはともにインドの方がはるかに多いと見なされていた。一度の荷積みで一〇〇カラットを超える石が送られることもある「コロマンデルのダイヤモンド」には当初大きな期待が寄せられたが、実際の供給量は紛争や現地での政策等に左右され非常に不安定であった。

更に、スカダナで手に入る品々の中でもっとも重視されていたのがダイヤモンドであったのに対して、コロマンデル海岸における取引の中心はあくまでも、綿布やリンネルなど各種の織物であり、藍に代表される染料であり、また香料の生産地にもたらされる米などの食糧であった。こうした品々の調達に支障を来さないことが肝要であったので、コロマンデルでの取引ではダイヤモンドのための予算も、同地における全体の予算配分を考慮した上で割り当てる必要があった。そのため、商務員たちがダイヤモンドの購入に過度な資金を費やさないよう抑制する指令も出された。

両産地の状況の変化は互いにその取引に影響を与えていた。すなわち、ポルネオでの購入量が減少するとインドでの取引の可能性を探り、逆に「コロマンデルのダイヤモンド」の閉山の余波などによる入手困難を受けて、中斷（或いは極度に減少）していたスカダナでの取引のため船を送るといった形で供給を補完しようとする姿勢が見られた。そして、

これによって原石をほぼ途切れずに本国へ送ろうとした。おそらくこのことが当時のオランダのダイヤモンド研磨業を支援、技術の発展にも結びついたのである。ダイヤモンドの美しさを最大限に引き出すといわれるブリリアントカットが開発されたのは、この世紀の末のオランダにおいてであった。

また、会社が入手したダイヤモンドの需要はヨーロッパに限らなかった。例えば東南アジア各地の君主に売却されることがあった。ミナンカバウの例のように、ダイヤモンドは以前から君主への或いは国家間での贈り物として有効でよく求められていた。その場合は、当然原石のままであるよりは美しく加工してある方が好都合であったはずである。実際に各地の君主たちはオランダに「研磨済みの」等々の条件付きの石を注文したり、既に加工済みの装飾品を購入したりした。このことは、こうした取引においてオランダのすぐれた研磨技術が貴ばれたことを示唆している。

一七世紀後半以降になると、オランダはイギリスとの海上覇権を巡る争いに敗れ、次第にその活動範囲を狭められていった。オランダは、スカダナでは一六九九年にバンテンと連合して攻略に成功し支配を確立したが、インドではやがて勢力を失っていく。また、長い間インドとボルネオでしか入手できなかったダイヤモンドも、一八世紀前半にはブラジルで鉱山が発見され、さらに一九世紀後半にイギリスの植民地であった南アフリカで豊かな鉱床が発見されてからは大量に採掘され始めた<sup>①</sup>。そして原石の取引は専らロンドンの市場で行われるようになったが、研磨については今日でも依然としてアムステルダム、アントウェルペンが重要である。また、工業の発達に伴ってダイヤモンドは様々な用途に使われるようにもなり、<sup>②</sup>現在ではその原石の産出量の約九〇パーセントは工業用であるという。

ところで、一六一一七世紀頃には一般にヨーロッパの研磨技術がアジアにおいて貴ばれたと言われるが、それを証明するものは目下のところほぼ全面的にヨーロッパ人自身による情報に限られている。本稿では、特に産地であるインドにおけるヨーロッパ人の宝石研磨技術に対する評価について、唯一のムガル朝側の史料として「*iusuk*」からの僅かな情報を引用したが、これだけではなお論拠が不充分であろう。また、*De Duijs* のようなヨーロッパ人研磨工のインドにおける立

場、君主との関係などには多分に不明な点が残されている。このような点についても、現地語史料に基づく更なる論証が必要と思われる。さらに、本稿で扱った時代より後、特に一六四〇年以降の、インドでの会社のダイヤモンド取引においてコロマンデル以外の主な入手先となったスーラトが果たした役割などを含めたその後の取引に関する多方面からの分析を行うことも、今後の研究課題としてあげられるであろう。

① 南アフリカでの発見によって初めてダイヤモンドの原石であるキンバレー岩の実態がわかり、大規模な採掘が可能になった。

② 例えば精密工作器械の切削工具としてダイヤモンドを用いる技術は、一八四〇年までには大体出来上がってしまったという。

(京都大学大学院学生)

## Dutch Diamond Trade in the Early 17th Century

by

WADA Ikuko

Diamonds had not been obtained except from India and Borneo before mines were found in Brazil in the 18th century. While in India they have been valued highest of all of the precious stones since ancient times, in Europe, coloured stones like rubies and sapphires were preferred because diamonds could not be cut and polished as beautifully as they can now. As the technique of cutting and polishing developed, especially in the Netherlands, from the latter half of the 15th century, their value rose.

In the early 17th century, diamond trade by the Vereenighde Oost Indische Compagnie (V.O.C.) was found both in India and in Borneo. At first, until around 1620, the V.O.C. purchased diamonds mainly from Sukadana on the west coast of Borneo, and then, after the discovery of new mines in Golconda in 1621, the diamond trade was organized in Coromandel on the southeast coast of India. In the 1620's, the diamond trade in both of these areas influenced each other. When the company could obtain only a few diamonds in one area, it ordered the staff of another area to purchase more.

The diamond trade was deeply connected with local rulers. In Golconda, all stones which were more than about 8 carats had to be offered to the king. He controlled mines and sometimes closed them. Some rulers in Southeast Asia bought polished diamonds from the V.O.C., sometimes at a higher price than in Europe. They seemed to like the European style cutting by Dutch polishers. Diamonds did not have the greatest volume and were not the most profitable for the V.O.C., but their continuous purchase in the early 17th century was deeply connected with the development of polishing techniques in the Netherlands. Even now the diamond industry in the Netherlands is very developed and famous.